

## 英語教育の中のフランス語

上 利 学

## French in Teaching English

Manabu Agari

## 0. はじめに

英語に限らず外国語の習得には大きな困難を伴うが、それに一層拍車をかけているのが英語と日本語の間にほとんど共通点がないことである。英語はインド・ヨーロッパ語族の中のゲルマン系の言語であるが、日本語はそこに属さない。例えば、英語で使用される文字はアルファベットであり語彙も全く異なるため一から覚える必要に迫られる。綴りと発音が一致していれば単語を覚えることは比較的容易であるが、実際には両者が一致しない場合が多々見られる。この不一致の主たる原因の一つは大母音推移 (the Great Vowel Shift) であり、15世紀前半から1700年くらいに渡って長母音が体系的に変化した現象を指す。音声変化に伴って綴りも変化するればよかったが、16世紀中頃から17世紀中頃にかけて綴りが固定したことが綴りと発音の不一致を生み出した。両者の不一致が生じているもう一つの大きな原因は外国語の借用である。英語の語彙に占める外国語の割合は高く、全語彙の7割を超える。借用元の綴りや発音が英語に持ち込まれことが英語における綴りと発音の不一致を助長した。このような歴史的経緯によって生じた複雑さが英語の学習を困難にしている側面があるだけでなく、学習意欲をそぐ一因になっている面もあると思われる。

このような課題に対処するためには、英語史の知識を活用して疑問点を解消することが重要であるが、さらに学習者の興味を喚起することが望ましい。例えば、日本語でも馴染みがある dental care が教科書で使われている時は、関連する逸話に触れることも一つの方法である。dandelion (たんぽぽ) には、その葉がライオンの牙 (dent de lion) に似ていたために命名されたという興味深い経緯がある。派生語である dentist を単に教えるよりも日常生活との結びつきを実感させ、英語を身近な存在として意識させることができる。

小論では、1066年の Norman Conquest 以降現代まで英語に影響を与え続けてい

るフランス語に焦点を当て、英語史の知識を有効に活用して英語の理解を深めると同時に、取り扱う例について日常生活と関連する情報を提供したり逸話を差し挟んだりすることによって、学習者の興味を喚起するような一つの形を示したい。

## 1. 語 彙

フランス語が英語に影響を与え始めたのは、エドワード王亡き後ノルマンディー公ウィリアムが王位に就き英国を支配した1066年以降である。フランス人が支配階級を独占したため、当然のことながら、政治、行政、法律など、国の運営に関わる語を中心として大量に英語に借用された。どのような分野からどのような語が持ち込まれたのかについて知っておくことは有益であろう。

政治・行政の分野では、authority, liberty, people, public, taxなどが借用された。法律に関しては、complaint, crime, judge, proof, punishmentなどが、軍事面ではcaptain, defence, guard, soldier, victoryなどがある。教会の要職にもフランス人が任命されたので、charity, clerk, faith, lesson, mysteryのように宗教に関連する語も取り入れられた。支配階級のフランス人は文化面でも影響を与えている。社交に関する語には、chair, dance, fashion, leisure, recreationなどがあり、apparel, boots, button, dress, robeなど社交に必要な服装に関する借用語も多い。diamond, emerald, pearl, ruby, sapphire, topazなど、貴婦人を彩る宝石(jewel)もフランス語由来である。食事に関する語も、質素な感じを与える本来語のbreakfastとは対照的に、豪華なニュアンスをもつdinnerを始めとして、appetite, feast, fruit, roast, salad, stew, tasteなどが英語に入った。家庭料理はbread, chicken, fish, milkなど本来語であるのに対し、大邸宅における裕福な人のもてなしにはliquor, onion, oyster, powder, spiceなどフランス語が多い。社会階級の違いは調理法についても同様で、bake, carveが本来語であるのに対し、boil, broil, fry, roastはフランス語である(Sheard 238)。

フランス語の中には、借用された当時は専門的な意味を持っていたが、時代が下るにつれて日常的な意味を帯びるようになった語もある。例えば、「司法」という意味を持つ法律用語justiceは「正義」という一般的な意味を派生させた。同様の例を以下に示す。括弧内の左側が専門的な意味、右側が日常的な意味である。

accuse (告訴する／非難する), case (訴訟事件／事例), cause (訴訟／原因), clerk (聖職者／店員), court (法廷／コート), false (虚偽の／間違った), innocent (無実の／無邪気な), judge (判決を下す／判断する), prove (遺言を検認する／証明する), session (開廷／集まり)

軍事用語についても、使用域が戦闘の場から一般的な状況に移行しているケースがある (aid, banner, challenge, danger, enemy, escape, force, guard, peace, prison)。例えば、banner は元来「軍旗」であったが、その後、横断幕という一般的な意味が生じた。インターネットの普及によって広がった広告媒体としての「バナー」も banner が源である。このように、専門の意味から一般的な意味が派生する仕組みに関する知識があれば語義の関連性が明確になるため、学習者の理解は深まると思われる。

フランス語起源の語は上流階級に関連する語が多い一方で、日常語も数多く見られる。

#### 【名詞】

action, air, age, city, cost, courage, flower, grief, hour, joy, labor, mountain, noise, opinion, pair, piece, power, river, season, sound, task, use, waste

#### 【形容詞】

able, active, brief, calm, clear, common, cruel, easy, foreign, honest, large, natural, nice, poor, pure, real, safe, second, simple, sudden, sure, usual

#### 【動詞】

arrive, carry, change, consider, continue, cry, destroy, enjoy, enter, increase, join, marry, pay, prefer, receive, rob, save, succeed, surprise, travel, wait

フランス語の影響の大きさは、借用語が属する領域に目を向ければ明白である。身体は日常生活の中で最も基本的な単位であるため、体の部位を表す語は本来語が中心である (face, head, eye, nose, mouth, ear, neck, body, arm, elbow, hand, leg, knee, foot)。例外である face, neck, leg のうちフランス語起源は face である。フランス語はインド・ヨーロッパ語族に属するがゲルマン系の英語と違ってイタリック系に属するため、語彙や綴り、発音体系も英語のそれとは異なり外国語という印象が強かったと思われる。それにもかかわらず英語に定着した事実は、face の語の長さが本来語の onlete, onsene, wlite (Sheard 234) よりも短いために便利であったことを差し引いたとしても、フランス語が日常生活に浸透するほど大きな影響を及ぼしていたことを示している。後者の二語 (neck, leg) は 8 世紀後半から 9 世紀後半にかけてブリテン島を襲撃したヴァイキングによってもたらされた古ノルド語 (Old Norse) からの借用語である。古ノルド語は英語と同じくゲルマン系の言語に属しているため、二つの言語が類似していたこと、さらに古ノルド語からの借用語の特徴として日常語が多かったことが、古ノルド語が外国語と見做されずに比較的容易に英語に同化した要因と考えられる。

日常生活で人間関係の中心となる親族は, father, mother, brother, sister, son, daughter のように本来語であるが, uncle, aunt, nephew, niece, cousin のように, 近親者を表す意味領域にフランス語が食い込んでいる事実は, いかにフランス語が日常生活に深く浸透しているかを示している。

### 1.1. Paired words

借用された語が本来語と同じ意味を持っている時には競合が生じたため, どちらか一方が生き残ったり, ニュアンスを変えるなどして双方が類義語として生き残ったりした。paired words においては一般的に, 本来語は質素で暖かみがあり, 打ち解けた感じを持つのにに対し, フランス語は上品, 優雅, よそよそしさを伴い, 形式張ったニュアンスを持つと言われている。例えば, 本来語の tell に対し外来語の inform は改まった場面で用いられる。また, cordial welcome よりも hearty welcome の方が, 心がこもっているとされる (Jespersen § 100; Baugh & Cable 180-81)。このように, formal/informal の違いはコミュニケーションを重視する学校教育では重要であろう。

建物についても palace や tower (ロンドン塔はかつて王宮として使用された) など上流階級を連想させる語が多い。14世紀に英語に入った residence は, the Prime Minister's official residence (首相官邸) のように, 質素な感じがする house や暖かみのある home などの本来語とは違って優雅なニュアンスを持っている。同じく14世紀に借用された mansion は日本語のマンションと異なり, 多くの使用人を抱えている貴族や荘園領主などが所有する大邸宅を指すように, 上流階級との関わりが深い語である。なかには folk/people と shun/avoid のようにフランス語起源の語が一般的な例もある。以下に paired words を例示する。

English	French	English	French	English	French
help	aid	begin	commence	wedding	marriage
hearty	cordial	ask	demand	feed	nourish
hide	conceal	deep	profound	child	infant
deadly	mortal	wish	desire	luck	fortune
fire	flame	lonely	solitary	folk	people
buy	purchase	stool	chair	shun	avoid

paired words の中には, 階級の違いが意味の分化を引き起こしたと思われる例がある。「豚」を例にとると, 下層階級のイギリス人にとって馴染みがあるのは飼育

している「豚」(swine) であるが、調理後の豚肉 (pork) を食べるのは上流階級のフランス人であった。Old French の porc は「豚」と「猪」の意味しか持たなかったが (*Dictionnaire de l'ancien francais*, s.v. *porc*), 「豚」を表す本来語の swine がすでにあったため、上流階級の食卓に馴染みがある「豚肉」に装いを変えて1300年頃英語の文献に初めて現れた (*Middle English Dictionary*, s.v. *pork*)。同様の例は他にも見られる (ox/beef, sheep/mutton, deer/venison)。下の表に示しているように、動物を指す本来語があったため、まずは動物の肉の意味で取り入れられ、その後動物の意味も持つようになった。

借用語	肉の意味	動物の意味
pork	豚肉 1300年頃	豚 1425年頃
beef	牛肉 1300年頃	牛 1330年頃
mutton	羊肉 1300年頃	羊 1325年頃
venison	鹿肉 1300年頃	鹿 1330年頃

(*Middle English Dictionary* を参考に作成)

階級差は職業名にも反映されている。Sheard によれば、支配階級と直接あるいは間接的に取り引きする職業の多くはフランス語起源であり、そのような関係のない職業は本来語が多い。例えば、生地を扱う織工は本来語の weaver であるが、仕上がった生地を上流階級のフランス人に届けるのは tailor (仕立て屋) である (Sheard 232)。当時の身分と語彙の関係を暗示する興味深い例である。

English		French	
baker (パン屋)	shoemaker (靴屋)	barber (床屋)	draper (呉服屋)
fisherman (漁師)	skinner (毛皮商)	butcher (肉屋)	grocer (食糧雑貨商)
miller (粉屋)	smith (鍛冶屋)	carpenter (大工)	mason (石工)

上の表の中の baker, smith, barber のように人名になっている例もある。1970年代から80年代にかけて活躍した音楽グループの The Carpenters や悪役レスラーとして名を馳せていた Butcher は日本でも有名であった。

## 1.2. Norman French vs. Central French

フランス語は11世紀後半から英語に流入しているが、13世紀からは借用するフラ

ンス語に違いが生じた。Norman Conquest 以降の借用語はフランスの北部方言である Norman French であった。しかし13世紀にフランスのカペー王朝が急速に台頭して政治的な力を増し、文化面でもフランスは最も洗練された社会と見做されたため、パリで話されている Central French の威信も高くなった。一方、地方の一方言となった Norman French を話すイギリス人は Central French の話し手から冷笑されることもあったため、13世紀以降は Central French が取り入れられるようになった (Baugh & Cable 140-41)。そのため、すでに借用済みの Norman French と綴りや発音が若干異なる同じ語が別の語として取り入れられた。以下の表に両者の特徴を示す。

Norman French	Central French	Norman French	Central French
/k/	/tʃ/	/w/	/g/
catch (捕まえる)	chase (追跡する)	reward (報いる)	regard (見る)
cattle (畜牛)	chattel (動産)	warranty (保証)	guarantee (保証)
car (車)	chariot (二輪戦車)	wage (賃金)	gage (担保)
		ward (病棟)	guard (警備員)

例えば、catch と chase は別個の語のように見えるが、フランス語の方言の違いによるものである。Norman French では /k/ の音が Central French では /tʃ/ となる。13世紀初頭に「捕まえる」という意味で catch が英語に入ったのち、1330年頃に「追跡する」という意味で chase が取り入れられた。追跡して捕まえるというように二つの意味は関連している。「追跡-捕捉」のプロセスのどの部分に焦点を当てるかという metonymy の原理によって意味の役割分担が生じた例である。「去る」と「置き忘れる」の意味を持つ leave も同様である。また、cattle と chattel には共通点がないように見えるが、「財産」という共通の意味を持っている。The Oxford English Dictionary (OED) によれば、cattle は「財産」という意味から「所有している動物」に限定され、更に指示範囲が限定されて「家畜の牛」を指すようになった (s.v. cattle)。ちなみに Oxford という地名は「牛が渡る浅瀬」に由来する。

Norman French のもう一つの特徴は /w/ の音である。warranty と guarantee も方言の違いに由来する。Norman French では語頭に /w/ の音を持っていたが、Central French では語頭の /w/ は嫌われた。そこで語頭に /g/ を入れて /gw/ と発音したが、そのうち /w/ が落ちて /g/ となった。語頭音を除いた部分の発音が同じであるのもっともである。reward は regard と同じように、語源的意味の「見る、注意する」から「報いる」という意味を発展させた。wage は「誓い」から「仕え

ている人への支払い」を経て「定期的な支払い」となり、*gage*は「誓いを果たすことを保証する高価なもの」から「抵当」という意味に転じた。16世紀にフランス語から入った*engage*（結婚の誓いによって結びつける）も語源を同じくする（*en-*は動詞を作る接頭辞）。婚約指輪は*engagement ring*であるが、和製英語では*engage ring*が使われている。*ward*は「よく見ること、監視すること」から「世話」や「世話をする場所」を通して「病棟」や「行政の区」となり、*guard*は「監視すること」から「監視する人」になった。上述した方言の違いを意味の発達とともに理解すれば、言葉の関連性に対する意識が高まると思われる。

### 1.3. Doublet

言語は時代と共に変化するため、数百年の隔たりを経て形態や意味が変化し、別の語と解され改めて借用されることがある。いわゆる *doublet*（二重語）である。例を挙げると、13世紀の借用語である *chief* は約600年の時の経過によって装いを変え、19世紀に *chef* の形で英語に取り入れられた。語源の「頭」という意味は、*chief* では「組織のトップ」に、*chef* では「料理人のトップ」に生き残っている。

*gentle* と *genteel* も同様の関係にある。13世紀に借用された時の *gentle* は「生まれのよい」という意味であった。その後、高貴さ、寛大さ、礼節など、生まれの良い人に相応しい資質を表すようになった。本来語の *man* との複合語である *gentleman* は「高貴な生まれに相応しい人」から出発して、階級に関係なく「紳士」の意味を帯びるようになった。同じ語がその後16世紀に *genteel* という形で英語に入ったが、19世紀中頃から「上品ぶった」という皮肉交じりの意味を帯びるようになった (*OED*, s.v. *genteel*)。

基本語彙の一つである *perfect* は中世に Old French の *parfet* から借用された。その後 *parfet* は16世紀のルネサンス期に盛んになった古典語の研究の影響を受け、語源であるラテン語 *perfectus* に合わせてラテン語化され *perfect* になった。一方フランス語の *parfet* はラテン語の影響を受けることなく、*parfait* の形で再度英語に入ると共に日本語にも入った。いわゆるパフェである。申し分のないスイーツというというニュアンスであろう。

*doublet* には借用が二度以上に渡る場合もある。*hospital* は元来「巡礼者や旅人をもてなす所」であり、もてなす主人が *host* であった。現代英語では視聴者をもてなす「司会」の意味を新たに加えているが、日本語に入ったホストは別の意味である。*hospital* が病気やけがを負った人の世話をする（もてなす）「病院」の意味を持つようになったのは15世紀以降である。ユースホステルで馴染みがある *hostel*（宿泊所）も13世紀に借用され、*hospital* と語源を同じくする。フランス語ではその後 *hostel* の *-s* が落ちて *hotel* になり、これが17世紀に英語に入った。さらに19世紀に

なると hospice が借用され、20世紀になって末期患者を対象とする医療施設という意味を新たに加えた。借用当時、hospice は「巡礼者や旅人が休息を取る所」という語源的な意味を持っており (OED, s.v. *hospice*, 1.), 11世紀にはフランス人聖職者の聖ベルナルド (Saint Bernard) が宿泊所 (hospice) でアルプス山脈を通る巡礼者や旅人をもてなした。旅人の搜索や救助に使われた犬は、彼にちなんでセントバーナード犬と名づけられた。

同じように、温泉で有名な英国のバースにある Royal Crescent はジョージ王朝建築の傑作の一つと言われている集合住宅である。この建造物は三日月の形をしているため crescent (三日月) が使われている。この語は500年後に *croissant* に形を変え英語に入った。「クロワッサン」のように語尾の子音を発音しないのは現代フランス語の特徴である。*croissant* の語源は *increase* や *crescendo* (クレシェンド) と同じ「増える」(-crease) である。ついでながら、*crescendo* のように音楽用語はイタリア語から入った例が多い (*piano*, *violin*, *adagio*, *cello*, *concerto*, *tempo*)。piano は *piano* (弱く) と *forte* (強く) から成る *pianoforte* の *forte* が脱落した形である。*fortify* (強化する) や *fortress* (要塞) は *forte* と語源を同じくする。

フランス語の影響は語に限らない。*make a noise* (物音を立てる) や *make peace* (和解する) など、フランス語の表現を翻訳した例 (*calque*) も見られる (表参照)。

その他にも *according to*, *in vain*, *by heart*, *take leave* など、例は多岐にわたる。*take French leave* (無断で退席する) は、パーティーの招待客であるフランス人が、主催した主人に挨拶することもなく立ち去った無礼な行為に由来する。イギリス人とフランス人の中の悪さを示す一例である。オランダ人に関する *Dutch comfort* (慰めにならない慰め), *Dutch courage* (酔った勢いから出た空元気), *double Dutch* (ちんぷんかんぷん) などの表現も、隣国との付き合いが難しいことを示している。

English	French
that is to say (すなわち)	c'est à dire
it goes without saying (～は言うまでもない)	il va sans dire
better late than never (遅くてもしないよりはまし)	il vaud mieux tard que jamais
if you please (もしよければ)	s'il vous plaît
without fail (必ず)	sans faille
keep company (付き合い)	tenir compagnie
because of (～のために)	par cause de
instead of (～の代わりに)	en lieu de



## 2. 綴りと発音

中英語期では、政治や宗教の分野は支配階級であるフランス人に占められていたため、文書の作成や写本の転写をする際にフランス語の綴りの習慣が持ち込まれた。現代英語では *life* の複数形は *lives* となるが、フランス語から持ち込まれた *v* の文字が */v/* の音に使われるようになった。古英語では綴り字 *f* が */f/* と */v/* を兼ねていたため、*lif* */l:f/* の複数形は *lifes* */l:vez/* となった。*f* を */v/* と読むのは、子音が前後を母音に挟まれた場合に有声化されたからである。この現象は同化と呼ばれ、現代英語でも頻繁に生じる。有声音と無声音を交互に発音するよりも連続する有声音を発音する方が容易だからである。*house* の複数形 *houses* も有声化されて */hauziz/* となった例である。この同化作用は他の語にも当てはまる (*knife*, *wife*, *leaf*, *half*, *self*)。 *knife* と *wife* は *f* が母音に挟まれているので単数形でも */naiv/* と */waiv/* になるように思われるが、古英語での形は *knyf* と *wif* であったので、それぞれ */knif/*, */wif/* と発音され、大母音推移を経て現在の発音になった。

本来語である *queen* は古英語では *cwene* と綴ったが、フランス語では */kw/* を *qu-* で表したため *quene* となった。*cwic* も *quic* (現代英語では *quick*) に改められた。フランス語から直接借用された語は *qu-* の形を保った (*quality*, *quarter*, *quit*, *question*, *quality*, *require*)。 *when* は発音記号 (*/hwen/*) と比較するとよくわかるが、綴りとは逆に */h/* → */w/* の順で発音するという極めて珍しい例である。古英語では *hwen* と綴ったが、フランス語では *hw-* の綴りがなかったため、フランス人写字生は *ch*, *gh*, *th* との類推 (*analogy*) から *wh* と綴った。*where*, *what*, *why*, *which*, *who*, *while* も同様である。

フランス語の影響で綴りと発音が一致しなくなった例も見られる。*guilt* は *-u-* がなければ綴りと発音が一致するが、古英語では *-u-* はなかった (*gylt*)。しかしフランス語では *guard* や *guide* のように *gu-* が一般的なもので本来語にも *-u-* が入った。古ノルド語からの借用語である *gess* (= *guess*) や *gest* (= *guest*) にも影響が及んだ。*sun* と *son* は綴りが異なるにも拘らず発音が同じである。古英語の形はそれぞれ *sunne* と *sunu* であった。印刷機が英国に導入される1476年以前は手書きが一般的であり、*-u-* と *-n-* が連続すると *-im-* や *-mi-* などと混同されることがあったため、写字生は *-u-* を *-o-* に書きかえ *son* となった。現代英語では */ʌ/* を表す綴りは *cut* のように *-u-* が一般的だが、*above*, *come*, *some*, *tongue*, *wonder* などの *-o-* も古英語では *-u-* であった。

*ground* や *loud* の *-ou-* については、古英語にはなかった *-o-* をフランス人写字生が持ち込んだ。他に *mouth* や *out* などが挙げられる。発音に注目すると、*-ou-* は */au/* であるが *group* や *soup* のように例外もある。古英語では *-u-* は長母音であっ

たが、15世紀以降の大母音推移によって長母音が /u:/ から /au/ に変わった。しかし *group* と *soup* が借用された17世紀には大母音推移がほぼ終わっていたので音声変化を受けなかった。*fatigue*, *machine*, *police*, *routine*, *unique* など、第二音節に強勢がありかつ長母音であるという点でフランス風の発音を保っている。

語の中にはフランス語の影響を受ける前の古い形を留めている例もある。the utmost importance (最も重要な) のような定型句で使われる utmost の ut は、out の本来の形であった。「もっとも外側に位置している」から「最大限の」という意味が生じた。古英語期に複合語となって形が定着したため、フランス語の影響を受けなかった。house もフランス仕様の綴りである。古英語期の形 hus の -u- は長母音であり、大母音推移によって長母音が /u:/ から /au/ に変わったが、すでに古英語期に複合語となっていた husband (家の主人) の /u:/ は短母音化された。複合語になると強勢のある音節の母音が短音化される傾向は breakfast (break + fast), Christmas (Christ + mass), holiday (holy + day), Monday (Moon + day), shepherd (sheep + herd), wilderness (wild + deer + ness) にも見られる。英語と同じゲルマン系の言語であるドイツ語から借用された dachshund (穴熊 + 犬) は、フランス語の影響を受けなかったため古い形を保持している。hound は綴りと意味の変化(犬→猟犬)を経て現代英語に生き残った。

color/colour や favor/favour の異綴りはアメリカ英語とイギリス英語の違いとして知られているが、この違いにもフランス語が関連している。二語の語源はフランス語から更にラテン語に遡る。ラテン語の語尾 -or は Norman French で -our に変化しそれが英語に持ち込まれた。ルネサンス期に盛んとなった古典研究に伴って生じた綴りのラテン語化により -our が -or と綴られるようになったが、doubt (F doute < L dubitare) や salmon (F saumoun < L salmo) のように綴りが固定した語が多かった一方で、-or /-our は一方の形に定着することなく大西洋を挟んで両者とも生き残った。ラテン語とフランス語の競合は、realize/-se のようにラテン語の接辞 -ize とフランス語の接辞 -ise にも見られる。アメリカ英語では -ize が一般的であると言われているが、David Crystal は、イギリス英語における -ize と -ise の割合は 2:3 であると述べている (102)。

借用時期の違いによって発音が異なる語もある。gentle と genre の語頭の子音はそれぞれ /dʒ/ と /ʒ/ である。gentle が借用された Old French では g- は /dʒ/ と発音されていた。その後13世紀に現代フランス語と同じ /ʒ/ に変化した (Baugh & Cable 209-10)。従って、13世紀以降に借用された語は usual (14c), rouge (18c), garage (20c) のように /ʒ/ の音を持つ一方で、音声変化以前の借用語は giant, join, joy, judge のように /dʒ/ の音を持つ。漫画『ドラえもん』の登場人物である「ジャイアン」は、英語の発音を基調としながらもフランス語交じり (F geant /ʒeã/) の

であるが、乳酸菌飲料の「ジョア」(F joie /ʒwa/) の発音はフランス風である。

同じように、chief と chef の ch- の発音も異なる。Old French では chance, change, choice のように ch- は /tʃ/ と発音されたが、13世紀に /ʃ/ に変化した。したがって、フランス語の借用語で ch- を /ʃ/ と発音する語は champagne (シャンパン), chic (粋な) など、比較的新しい時期に借用されたと判断できる。シュークリーム (chou à la crème) はフランス語から日本語に入った外来語であるが、シュークリームに「キャベツ」の意をもつ chou が使われているのは、両者の形が類似しているためである。因みに、英語では不可算名詞を数えるときに piece や sheet を使うが、キャベツ (cabbage) やレタス (lettuce) などに a head of を使うのは、それらが頭に似ているからである。同じ洋菓子のシフォンケーキはフランス語の chiffon (ふわっとした) に由来する一方で、chocolate は17世紀にフランス語またはスペイン語から取り入れられ、anglicize されて /tʃ/ となった。チョコレートは英語から入った外来語であるが、ショコラ (chocolat) はフランス語を源とする。語末の子音を発音しないのは現代フランス語の特徴であるが、その特徴を英語で保持する傾向は17世紀に遡る。Robertson & Cassidy は、1660年の王政復古以降フランス語の発音は意図的に保たれたが、それはフランス語を含めた外国語の習得が教養と社交儀礼の仕上げと見做された時期と重なっていると指摘している (160-61)。威信あるフランス語の借用について Görlach は、フランス語が教養ある一流のエリートであることを示す機能を持つようになるに従って英語の音韻体系に合わせなくなった傾向は1550年以降であると修正している (168-69)。Paris を「パリ」と読むように、語末の子音を発音しないフランス語の特徴は、英語だけでなく日本語にも持ち込まれている。括弧内は英語に借用された時期と意味を示す。

ballet (17c: 踊るバレエ), bouquet (18c: ブーケ), buffet (17c: ビュッフェ)  
gourmet (19c: グルメ), grand prix (19c: 大賞), vagabond (15c: 放浪者)

15世紀に借用された vagabond は、anglicize されるのに十分な時間があつたため語末の -d は発音される。赤塚不二夫の漫画『天才バカボン』はフランス語の発音をベースにしたものである。vagabond を除く語は、強勢が最終音節にあるという点でもフランス風の発音を保っている。食通の gourmet が de luxe (19c) な hotel (17c) の restaurant (18c) で、menu (19c) から a la carte (18c) 式で hors d'œuvre (18c: オードブル) を選ぶときはフランス語を伴う。

語末に強勢を置く傾向はフランス起源の接尾辞 -age で終わる語にも当てはまる。中世に借用された message (13c), passage (13c) は、語幹の最初の音節に強勢を置くという英語の音声規則に従って強勢が第一音節に移り (Horobin & Smith 52),

さらに第二音節の母音には強勢がないため /ɑ:/ から /i/ に弱化された。しかし同じ -age を持つ語でも比較的最近借用された garage (20c) や massage (19c) はフランス語の発音を維持しており、第二音節は /ɑ:ʒ/ と発音する。garage は発音が一定しておらず、Horobin & Smith によれば、英国の年配者の多くとアメリカ人は第二音節に強勢を置くが、英国の若者は第一音節に強勢を置く傾向が強い (53)。

借用時期が新しい語がフランス語の発音を維持する傾向は en- の接頭辞を持つ語にも当てはまる。初期近代英語期までに借用された語は enter (13c), entry (13c), entrance (16c), enterprise (15c) のように /en-/ だが、17世紀後半以降に借用された encore (18c: アンコール), ensemble (18c: アンサンブル), entrepreneur (19c: 企業家) などはフランス語の /ɑ/ を保持している。ensemble は語中の -e- にもフランス風の /ɔ/ が保たれ /-sɔmbəl/ と発音する。一方、中世に借用された assemble (13c) や resemble (14c) は anglicize されて英語らしい /-sembl/ になった。

### 3. 文 法

上述したように、フランス語の影響が最も色濃く出ているのは語彙であった。語彙の増加は英語の統語構造に影響を与えないため、外国語は取り込みやすい。しかし、文法は言語の骨格を形成するため、外国語が言語の中核に変化を及ぼすほど大きな影響を与えることは稀である。フランス語の場合も同様で、語句のレベルでの借用は多いものの、文法面での影響は少ない。その中でも若干の例に触れておきたい。

英語教育において大きな課題になってはいないが、時として浮上するのが人称代名詞である。She is taller than \_\_\_\_\_. や It is \_\_\_\_\_. のような文では、下線部に入る人称代名詞は I なのか、それとも me なのかが問題になることがある。この点について、まずは歴史的な発達に目を向けたい。It is \_\_\_\_\_. を例にとると、古英語では ic hit eom (= I it am) であったが、14世紀後半に it am I が生じ、その後 it is I になった。中英語期に SVO の語順が確立し be 動詞 am を主語 it に合わせるようになったためである。現代英語で一般的な it is me が出現するのは初期近代英語期である (Mustanoja 133)。I から me への変化は、人称代名詞の me が動詞の目的語であるという意識が強くなったことによる。Mustanoja は否定しているが、it is me はフランス語の c'est moi の影響で生じたという意見があることを記しておく。フランス語の影響を証明することは難しいが、両者にパラレルな構造が存在していることは興味深い。

It is I と It is me の併存にも触れる必要があるだろう。18世紀は理性の時代と言われ、ルネサンス期に英語の可能性が広がった反動として理性と秩序が重視され、英語に関しても理屈で説明できないものは非難された。It is me は一般的に使用さ

れていたにも拘わらず、me は本来主語の位置であったため、正しくは It is I とされた。このように、慣用よりも規則を優先する規範主義は19世紀に隆盛を極め、その影響は20世紀にも及んだ。現代では、教養ある話し手が用いている用法が一般的であればそれを認めるという立場（記述文法）が主流であり、単に正誤の問題ではなく、書き言葉や話し言葉などの使用域（register）の違いなども考慮される。Leech & Svartvik が主格の I は formal で me は informal だと指摘しているように（258）、コミュニケーションを重視する教育では使用状況にも注意を向けるべきであろう。

フランス語が文法に与えた影響が明確だと考えられているのが比較級と最上級である。比較には -er や -est によって語尾を変化させるものと more や the most を使った迂言用法があるが、後者の用法についてはフランス語の plus と le plus が影響を与えている。英語は元来屈折言語であったため、語尾屈折によって意味関係を表した。比較についても同様で、longer, longest のように語尾を変化させた。Mustanoja によれば、屈折比較は中世を通して一般的であったが、more と most を使った迂言比較は中世初期の記録を初例として15世紀に増加した。それぞれ「より多い」と「最も多い」という意味をもつ本来語の more と most は、より強調したりより明確に示したりするために比較の機能を帯びるようになったようである。フランス語の影響は、屈折によって意味関係を表す分析的言語から語順によって意味関係を表す統合的言語へ移行したことが迂言的表現の増加を促進した点に認められる（279-80）。近代英語では beautifuler や more beautiful のように両方の形が併存したが、現代英語では clear のような単音節語は -er, -est に、famous のような多音節語は more, most を付加する方法が一般的となり、この迂言比較の傾向はさらに強まっている。例えば、common は同じ二音節語の famous と違って屈折形と迂言形を併せ持つが、2009年に出版された『スーパー・アンカー英和辞典』（第4版）の common の項目の -er, -est には「まれ」と表示されているように、現代英語では屈折形はほとんど見られない。この迂言比較への流れは brave や keen などの一音節語にも及び今後とも続くと考えられる。

#### 4. 終りに

上述したように、英語に大きな影響を与え続けているフランス語の影響に着目して、英語を教える際の一つの形を示した。英語は外来語の割合が高く、それぞれの外国語が内包する綴りや発音を持ち込まれたため、基盤となっている英語の規則にそぐわない例が混在するが、英語史の視点から考察することによって、綴りや発音の不規則な関係などフランス語が英語に及ぼした影響を明らかにした。また、類義語の関係や使用域の違いなど英語の運用に関わる実践的な要素に触れるだけでなく、

借用語に纏わるエピソードなどを織り交ぜ日常生活との接点を意識した情報を提示することが、学習者の意欲を喚起する方法として有効であると示すことができたと思う。英語の重要性がかつてないほど高まっている今こそ、英語史の知見を顧みるべきであろう。

#### 参考文献

- Barber, Charles. *The English Language: A Historical Introduction* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).
- Baugh, Albert C. *A History of the English Language*, 5th ed. (London: Routledge, 2002).
- Crystal, David. *Spell it Out: The Singular Story of English Spelling* (London, Profile Books, 2013).
- Görlach, Manfred. *Introduction to Early Modern English* (Cambridge: Cambridge University Press, 1978, rpt. 1993).
- Greimas, A. J., ed., *Dictionnaire de l'ancien français* (Paris: Larousse, 1989).
- Hoad, T. F., ed., *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Oxford University Press, 1986).
- Horobin, Simon & Jeremy Smith. *Introduction to Middle English* (Oxford: Oxford University Press, 2002).
- Jespersen, Otto. *Growth and Structure of the English Language*, 9th ed. (Oxford: Basil Blackwell, 1962).
- Kurath, Hans, et al., eds., *Middle English Dictionary* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1956–1999).
- Leach, Geoffrey & Jan Svartvik. *A Communicative Grammar of English*, 2nd ed. (London: Longman, 1994).
- Mustanoja, Tauno F. *Middle English Syntax* (Helsinki: Société Néophilologique, 1960).
- Nevalainen, Terttu. *An Introduction to Early Modern English* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006).
- Onions, C. T., ed., *The Oxford Dictionary of English Etymology* (Oxford: Oxford University Press, 1966; rpt. 1994).
- Orr, John. *Old French and Modern French Idiom* (Oxford: Basil Blackwell, 1962).
- Robertson, Stuart & Frederic G. Cassidy. *The Development of Modern English*, 2nd ed. (Englewood Cliffs: Prentice-Hall, 1954).
- Scragg, D. G. *A History of English Spelling* (Manchester: Manchester University

- Press, 1974).
- Sheard, J. A. *The Words We Use* (The Language Library) (London: Andre Deutsch, 1954).
- Simpson, J. A. & E. S. C. Weiner, eds., *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1989).
- Upward, Christopher & George Davidson. *The History of English Spelling* (Wiley-Blackwell, 2011).